

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

HOT TOPICS

松井やより全仕事展

—2007年6月18日～22日まで和光大学図書館梅根記念室にて展示を行いました。ジャーナリスト松井やよりさんの生い立ちから、仕事を紹介されました。また、関連イベントとして20日にはシンポジウム「世界的ジャーナリスト松井やよりと私たち」を、27日には映画「ガイサンシーとその姉妹たち」の上映会が開催されました。

ジェンダー・フリー・スペースの奥の本棚には、「松井文庫」という札が掲げられている。和光大学の片隅に、松井やよりさんはまだ、そうして生きている。

毎年恒例の展示、今年は「松井やより全仕事」というパネル展だった。女たちの戦争と平和資料館から拝借したパネルを運び込み、会期前の土曜日には先生学生入り乱れて和気藹々と展示スペースの準備をした。パネルの一部が掲示器材の問題や空調の関係で落ちるというハプニングもあったが、会期中は図書館入館のついでに立ち寄る人が多く、普段見られない幼少時、学生時代の写真、古い記事のパネルなど、偉人というより私たちと地続きの松井さんの仕事を見ることができた。

関連イベント「世界的ジャーナリスト松井やよりと私たち」では、新聞記者退職後の仕事である女性会議に取り組む松井さんの報道映像や、闘病のルポ『松井やより全力疾走』が上映され、長尾先生の司会で、井上先生、船橋先生が松井さんの思い出話をしてくださった。不正には堂々と立ち向かうけれどもゴキブリに悲鳴を上げる松井さんの様子に大笑いしながら、「全仕事」のうちにはそうしたプロフィールも含まれ、それは後進世代が歴史として編んでいく必要があることを改めて思った。



シンポジウムの様子(左から船橋、井上、長尾)



このルポ作品の中には、松井さんが後進の人たちに資料の引継ぎをする場面があり壁一面に作り付けた本棚がちりと写る。その一面を「ここが私の書いたもの」と松井さんが指差しているのだが、それ以外の蔵書こそが、今ジェンダー・フリー・スペースで私たちが日常的に手に取り、貸し出しもしてもらえ、後進のための財産になっている。この蔵書や彼女の著書を学び、次の何かを作り出していくことが、松井さんの遺志を継ぎ生かしていくことになるのだと思う。

(小澤かおる/現代社会関係論コース院生)

学生の感想より(一部抜粋)

◎死期を目前にしても自分の使命を信じ、まっすぐに生きた人生に本当に学ぶ所がある。松井やよりの社会に対する問題指摘の鋭さと、全体を見通す力の卓越さ、特に東南アジアの性産業への厳しい記事は印象に残りました。

◎松井さんの行動力や強さ、好奇心、女性としてのプライドや誇りを持っているのを見て、とてもうらやましく、また同じ女性としてすごくかっこよく思いました。「どんな知識を持っても行動しなければ意味がない」という言葉は、とても心に残る言葉であり、とても重要なことだと思いました。

◎今回初めて、「松井やより」という人の存在を知ることができた。慰安婦として扱われていた女性のこと、差別、男性よりも軽く見られている女性の存在、そういったことを同じ女性である彼女が書くことはとても重い行為で、パワーと勇気のいることだと思う。私自身も、また別の人でも、これから彼女を知ることにより、何かを知るきっかけになると思う。

◎日本の女性の社会参加や国民の意識の改善は大切なことだろうと思います。そのために、本当に命をかけて最期まで闘った人なのだと感じました。沢山の人が松井やよりさんに憧れ、共感し、その意志を受け継いでいこうと思う気持ちが本当によく分かりました。

異文化とジェンダー

和光的彼女 IN 韓国

EVENT
REPORT

——2007年5月30日、和光大学の卒業生でもある田端かやさんをお招きして、大学時代の様子から韓国での留学生活や結婚を通しての様々な異文化体験を熱く語って頂きました。

講演会では日本・韓国での学生時代、映画「ナナムの家」、386世代(1990年代に30代で、1980年代に学生運動に参加した、1960年代生まれ)など、多岐に渡る話題が展開された。印象に残った話題では386世代による「改革」の動き、境界人としての葛藤、「ナナムの家」の監督でもあるピョン・ヨンジュとの出会いによる葛藤の克服といったものがある。

韓国社会の名門である梨花女子大——大抵は、梨花に<在籍していることだけ>が重要視される——に在籍していたが故に様々な面で得をしてきたと、田端さんが述べたように、梨花女子大という肩書きは男性や社会に対して大きな訴求力を持っている。それは同時に、男性の側が梨花の出身者に対して積極的なアプローチを行うことでもある。梨花に関わる価値については既に触れたが、そういった価値観は梨花で女性学を学ぶ女学生たちの生きづらさを助長しているという。

韓国では「日本人」という「外国人」である田端さんは、学生たちが関わっていた「ハルモニたちの日本大使館前集会」や、大使館前で行われていたデモに参加する中で、日本人であることに對して葛藤を抱くようになったという。葛藤は冒頭でも述べたように、ヨンジュ監督との出会いで克服されていく。「ナナムの家」(ナナムは韓国語で「分かち合い」を意味する)は、女性の経験の記録をテーマにした三部作のドキュメンタリー映画であり、反日ではなく、世間に広く存在している情景や女性問題を取り扱っている。国籍や学歴に捉われず、女たちが抱えている問題や、女たちを取り巻いている共通の情景に対する認識を「分かち合う」というメッセージが、田端さんが抱えている(韓国社会の)日本人であり、エリート層であるという二重の葛藤の解消に繋がったのだろう。田端さんは監督と出会い、葛藤が解消されていく中で、普遍的な女性問題に取り組んでいくことを決めたという。

田端さん自身も、そこに属する386世代が積極的に、とくにマス・メディアに積極的な進出を果たして韓国社会を変える動きを見せているということを知った際、386世代の行動や実践力は、私の中で即時に羨望的となった。講演の中で「386世代の親たちが生存している限り、性別役割分業に基づいた



不平等労働が解消されることはないかもしれない」という一説があったが、韓国では386世代がマス・メディアに進出し、性別役割分業を無批判に強調することを避けた番組

がお茶の間に流されているという。そういった話を聞くことで、私はことさら日本と韓国の現状を比較してしまい、386世代に対して再度、羨望の眼差しを送ってしまう。主導権が、親から子——386世代へと引き継がれる中で、韓国社会の普遍的な女性問題(普遍的な男性問題もあるだろう)が完全に解消される……とまではいかないが、現状よりも良い方向へと向かっていくことは確実だろう。

(鈴木真吾/現代社会関係論コース院生)

CINEMA

いま、日本軍の性暴力を語る

班忠義監督「ガイサンシーとその姉妹たち」

長い年月封印してきたつらい出来事があるとしたら、私はそれを普段着のままカメラを前に自分の言葉で語るができるだろうか。この映画には、十代に負った深い傷と、さげすみの目を向けられる苦しみを、半世紀にわたって心の奥に閉じこめていた女性たちの、姿とことばが記録されている。

中国山西省(北京から西へ300、太行山脈の西側)の盂県に侵攻した日本軍は、1942年から44年にかけて村々の女性たちを拉致監禁し、性暴力をふるった。日本軍による性暴力被害者として中国で最初に名乗り出た万愛花さんはこの地の出身で、92年来日し「日本の戦後補償に関する国際公聴会」で証言した。当時日本に留学していた班忠義監督は、ある集会で万愛花さんの生の声に触れて以来、毎年盂県の戦争被害女性を訪ね、彼女たちの生活の場でその姿を撮り続けた。

往事を語る村人の話にまず登場するのが、ガイサンシー(蓋山西=山西一の美人)こと侯冬娥さんだ。十代半ばで出産し、四つになった息子の目の前で拉致されたガイサンシーは、すさまじい暴行を受け意識不明となり村に返された。いくらか快復すると、日本軍に脅された村長が再び彼女を差し出してしまふ。

きめの細かい白い肌に大きな目をしていたというガイサンシーは、このドキュメンタリー映画には直接現れない。班監督が訪ねた前年に亡くなっていた。なぜ村人は彼女の名を語り継ぐのか。そして女性たちは今なぜ過去の体験を語るのか。スクリーンに映し出されるひとりひとりの語りや仕草、表情の中に、私たちはそのこたえを発見していくことになる。

6月30日、ジェンダーフォーラムは共通教養委員会と共催で当映画を上映、「近代日本の戦争と軍隊」受講生など約240名が参加。折しも同月26日、安倍首相の「狭義の強制性はなかった」との言に端を発した「従軍慰安婦問題」について、米国外交委員会が日本に公式謝罪を求める決議案可決している。映画を見逃した人にも見た人にも、班忠義『ガイサンシーとその姉妹たち』(梨の木社、GFSでも閲覧可)がおすすめ。

(加藤三由紀/表現学部)

敗戦、去勢、「逆コース」

黒澤明『野良犬』を読む

2007年7月4日、ジェンダーフォーラムの主催で、上記のタイトルの講演をさせていただいた。タイトルは、まるで落語の三題話風であるが、決してふざけているわけではない。この三つの言葉は、映画『野良犬』(1949年)を読み解く鍵であり、現在あえてこの映画を再読することの意義を物語っている。「戦後レジームからの脱却」というスローガンの下で進行する改憲への拙速な動きを前に、わたしたちは今こそ、改めて「(敗)戦後」とは何だったのかということを考える必要があるのではないか。

改憲派の主張は、「敗戦後の日本は、アメリカによって去勢されてしまい、国家としての体をなしていない。アメリカに押し付けられた憲法はその象徴である」といったものだ。ここに見られる「敗戦トラウマ」とでも名付けるべき主張の根拠は、どこにあるか。もちろん、敗戦後の日本映画を見れば、家父長の没落や傷ついた男性など、「敗戦」でこの社会(そして支配者である男性)が「去勢」されているようなイメージを見出すことは容易である。こうしたイメージへの記憶が存在することで、改憲派の主張は非常に説得力溢れるものとなり得る。

しかし、わたしたちは何かを忘れてはいないか。つまり、敗戦後の「去勢」は永続的なものだったわけではない。1949年頃から「逆コース」が起り、追放された戦犯が復活し、共産党員とそのシンパはパージされたということ。実際、追放解除された元戦犯の一人(岸信介)は首相となり、現在の日本の首相はその孫(安倍晋三)なのである。

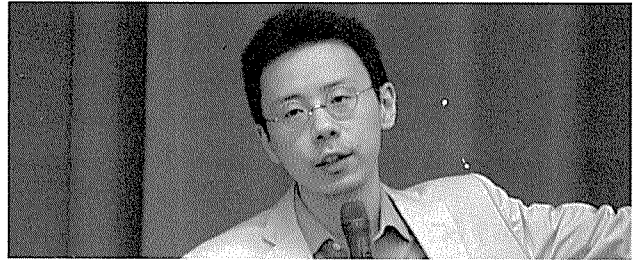
わたしは、『野良犬』の再読によって、「敗戦トラウマ」神話の打破を試みた。『野良犬』のストーリーは、新人刑事が拳銃を奪われ、その拳銃が犯罪に使われることに苦悩し、ベテラン刑事の力を借りて、拳銃を取り戻すというものだ。拳銃がファルス(男性性の象徴)であることからすれば、現在において、この物語を「敗戦」による「去勢」をめぐる物語として記憶することは比較的容易なことであろう。しかし、この映画を制作された時代環境(「逆コース」)に思いを致すことで、物語の様相はがらりと変わる。

この映画の中で、良き父であるベテラン刑事に野良犬と名付けられた犯人が、なぜ幸せなカップル・夫婦・父を襲うのか。野良犬にはなぜ父がないのか。父はなぜ撃たれても死なないのか。その答えは「逆コース」にある。つまり、この映画は「敗戦」による「去勢」を、「父」の不在による「家」の秩序の危機、「子」の反逆/跋扈として描き、ラストシーンを「父」の凱歌で締めくくっている。この映画は、「去勢」の映画ではあるが、最終的に「去勢」されたのは「父」ではなく「子=野良犬」であり、「父」が勝利する「逆コース」についての映画なのである。なお、映画は、「父」が主人公に「野良犬」の存在を忘れるよう論ずる場面で終わる。こうした「逆コース」の強制記憶喪失に抗することは、まさに現代の政治課題でもある。

今回の講演に際して、会場から刺激的な質問をいくつか受

けた。例えば、「子」が「父」に対して反逆するということは、ルーティンとして繰り返し描かれているのではないか、忘れさられてはいないのではないか、というものである。なぜ、こうした主題を描き、感情移入してきた側の人間が、長じて「父」の側に立つという構造が繰り返されてきたのか(例えば石原慎太郎)。この問題を含め、『野良犬』の主題をめぐる問いには、まだまだ先がありそうである。

(千葉慶/本学非常勤講師)



ESSAY

ヒトはリアル羊の夢を見るか

マネキンといえば一般的にはアングロサクソン系の顔立ちをしているものだ。無論、のっぺらぼうやサモトラケのニケよろしく顔や手足のないタイプも多く見られるが、マネキンときいてどんな顔を思い浮かべるか、というイメージの問題からいっても彫りが深く、鼻が高い「西洋人顔」が最も浸透しているといえるだろう。ところで最近、量販店の子ども服売り場を歩いていると、奇妙な顔のマネキンに出くわすことがある。そのマネキンの目は非常に大きく顔の上半分の面積ほとんどを占め、瞳にはキラキラと光る希望の星が満ち溢れている。うおっまぶし!

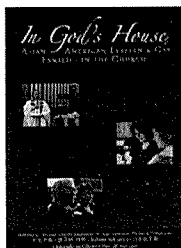
そんな目でオレを見ないでくれ! まあつまるところ一言でいえば要するにアニメ顔のマネキン、なのであるが。マネキンとはそもそも商品である服を美しく見せるための人形であり、ファッション・モデルの代用品である。そして消費者はより美しく服飾品を身につけようと、マネキンを理想的な身体モデルとして崇め奉り、人工的な肉体改造に勤しむこととなる。しかも多くの日本人にとってはあの「西洋人顔」もまた憧れの対象であったはずだ。この国においては「ハーフ」は「美」の代名詞といっても過言ではない。カロリーだってハーフがいい。ところがここ数年の間にちらほらと現れ出したキャラマネキンである。これはつまり、日本人の理想とする「顔」がアニメやマンガ的なそれに変わってきたということなのか。確かに、特に子どもたちにとってはあのような顔はとても親しみのあるものかもしれない。しかし、子どもの問題だけではすまないだろう。むしろ、子どもと一緒に子どもの服を買いに来る、親の視線にこそ考えるべき問題が潜んでいるように感じる。そういえば、アニメやマンガのキャラクターのような、一風変わった名前を持つ子どもも増えている。人間の人間に対する欲望と視線の問題を、キャラマネキンはその星が瞬く瞳に秘めている。

(塩脇泰生/現代社会関係論コース院生)

IN GOD'S HOUSE

キリスト教会におけるアジア系米国
レズビアン・ゲイと家族

監督：リナ・ホシノ
製作：2006年
23分／英語（日本語字幕）



アメリカ合衆国のアジア系アメリカ人たちは少数民族として、多くの場合教会を核としてコミュニティを作り、支えあってきた。米国でも60年代末から70年代初頭には、それまでの社会のあり方に疑問が持たれて様々な社会運動が展開し、その中には性的少数者に対する差別の問題も含まれていた。しかし少数民族にとって、それは当時もその後も「白人のこと」でしかなく、コミュニティの中で性的少数者は不可視化されていた。一方キリスト教会では、福音派などのキリスト教原理主義的な考え方が支持を集めつつあり、伝統的とされるキリスト教観に基づいて性的少数者を差別、糾弾している。

家庭生活を大切にす環境の中で民族差別と闘いながらも、両親に愛され普通の学生生活を送り、聖書を読み賛美歌を歌っていた子どもが突然自分は同性愛者だと気づく。その時、周囲の世界は同性愛者を糾弾する教会の集會に集まる友人たち、自分のセクシュアリティを「悪い選択」あるいは「病氣」、あるいは神に対する罪ではないかと考える家族であったりする。

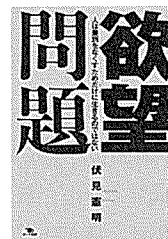
当事者の若い女性は、自分のありようを含めて受け入れてくれる教会を探し、そこで信頼できる指導者や友人と巡り会い、家族との対話を深めて、家族とともに成長する。何よりも、自分自身との対話を繰り返し、生きなおしていく。当事者の自分史の語り口、そして困難を克服した人間のさわやかな表情の存在感。映像の力の大きさを感じさせられる作品である。

(小澤かおる／現代社会関係論コース院生)

欲望問題

人は差別をなくすためだけに生きて
いるのではない

著者：伏見憲明
出版：ポット出版／2007年
¥1500



日本におけるゲイ・ムーブメントをリードしてきた伏見憲明が、フェミニズムやセクシュアル・マイノリティの運動と思想の問題点を大胆に取り出して論じた、問題提起の書である。

論点の第一は、これまでの反差別の運動が生み出してきた「倫理主義」。かつての自分も含めて、運動家たちは、社会（マジョリティ）を自分たちを抑圧する敵だとみなし、「マジョリティが反省するのが当然、こちらの事情を説明する必要などない、こちらに正義があるのだから」と暗々裏に思ってきた。それが自己の正義の絶対化を生み出す、と伏見は言う。正義から他者を糾弾するのではなく、互いをそれぞれ異なった欲望をもって生きる対等な存在として認めようとして、互いの声に耳を傾け合う。そういう運動と思想のセンスを伏見は提案している。

もう一つの論点は、「ジェンダー・フリー」。男女という「性別二元制」のシステムは確かに抑圧をもたらしてきたが、しかしその二元制こそが性愛の欲望を可能にしているのではないか？ 異性愛者の欲望もセクシュアル・マイノリティの欲望も、性別二元制を前提にして成り立つのではないかと伏見はいう。この発言を単なる「反動」とみなすのではなく、原理的にそういうのかどうかを、真摯に考えてみるべきだろう。「ジェンダーのもたらす抑圧や差別を解体しつつ、かつ、性愛の欲望を可能にするような仕方とは何か？」という、思想的な問題提起として受けとめたい。

(西研／現代人間学部)

EVENT INFORMATION

秋からのイベント情報

ワークショップ

◎デートバイオレンス

日時…………… 10月24日(水) 15:00 - 18:00

場所…………… 未定

講師…………… 瀧田信之(湘南DVサポートセンター代表)

自分を大切に、自尊心を持って生きることが暴力防止につながることを伝えるプログラムです。暴力によらない問題解決方法、コミュニケーション方法を学びながら、暴力について考えます。楽しく！安全に！そして、身近な問題を取り上げるワークショップです。

<http://www.kodomo-support.org/>

この他にも色々計画中です。詳細は掲示やHPをご覧ください。

◎イベント募集中

皆さんからのジェンダーに関する企画の持ち込みを歓迎します。

◎ジェンダーカフェ開催中

日時…………… 毎週金曜日のお昼休み

場所…………… ジェンダーフリースペース(G112)

お昼を食べながらジェンダーについて、感じていること思っていることおしゃべりしてみませんか。教員／学生いつでも参加自由なので、覗いてみてください。